

会計研究科修了生アンケート調査結果

(1) アンケート調査の趣旨

この調査は、修了生の意見を聴取することによって、会計研究科の教育課程、教育方法等の改善を図ることを目的として実施された。

(2) アンケート調査の実施概要

実施主体：兵庫県立大学大学院会計研究科

実施対象：会計研究科修了生234名（宛先不明者を除く）

実施時期：2015年9月11日配布、2015年12月5日回収締切

実施方法：郵送調査法

(3) アンケート回収状況

回収数：58票（白票・無効票ゼロ）

回収率：25%

問1 入学年度についてお答えください。

ア 2007年度（一期生）	7(12%)
イ 2008年度（二期生）	7(12%)
ウ 2009年度（三期生）	7(12%)
エ 2010年度（四期生）	14(24%)
オ 2011年度（五期生）	6(10%)
カ 2012年度（六期生）	5(9%)
キ 2013年度（七期生）	12(21%)
	58(100%)

問2 性別についてお答えください。

ア 男性	39(67%)
イ 女性	19(33%)
	58(100%)

問3 現在の仕事についてお答えください。

ア 顧客の求めに応じて行う監査業務、税務業務、コンサルティング業務等に就いている	13(22%)
イ 企業などの民間部門で会計・財務・税務に係る業務に就いている	26(45%)
ウ 企業などの民間部門で会計・財務・税務以外の業務に就いている	6(10%)
エ 政府（自治体を含む）・非営利部門で会計・財務・税務に係る業務に就いている	6(10%)
オ 政府（自治体を含む）・非営利部門で会計・財務・税務以外の業務に就いている	1(2%)
カ 受験準備	2(4%)
キ その他 （自営業：1、非就業者：3）	4(7%)
	58(100%)

問4 会計研究科で学んだことは、全体として現在の仕事にどの程度役に立っていると思いますか。(何らかの理由で一時的に仕事を離れている場合には、以前の仕事を想定してお答えください。)

ア 非常に役立っている	18(31%)
イ ある程度役立っている	33(57%)
ウ あまり役立っていない	6(10%)
エ 役立っていない	1(2%)
	58(100%)

問5 あなたが会計研究科で学んで有意義であったと思うことを次の中から選んでください(複数回答可)。

ア 原理的・理論的性格の強い授業科目	36(24%)
イ 実務家教員が担当したケーススタディをはじめとする実践的性格の強い授業科目	41(27%)
ウ 基礎演習・研究演習	26(17%)
エ 自学自習	16(11%)
オ 学生同士による相互学習	30(20%)
カ その他 (人的つながり、他研究科の授業科目)	2(1%)
キ なし	0(0%)
合 計	151(100%)

問6 問5に関連して、選択した項目が有意義であるとする理由についてお答えください。

ア	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基盤をしっかりとやったおかげで、会社に出てから何をすればよいか、新たに学ばなければならないことは何かを考えることができます。 ・ 会社の運営に関わる際に、研究科で基礎をやっているのので、足りない部分の何を勉強すればよいのかが分かります。 ・ 実務上、基準書に書いていないケースを考える際に、考え方を実態に即したものと考える時に有意義である。 ・ 会計研究科における授業は、暗記ではなく理解をして会計の知識を深めていくことができる有意義なものでした。特に公認会計士論文式試験において役立ちました。 ・ 将来どの仕事においても客観的視点から問題を解決する能力が必要となるので、早いうちに専門分野の基礎的知識を身につけて損はないと考えたからです。 ・ 相談する癖がついていた方が会社に出て役に立つから。原理や理論については、実務で学ぶことは難しいから。 ・ 担当業務について、その原理を理解し、なぜそう処理するのか、また、どうやって検証できるのかを自ら考える能力を育ててくれたからです。また、自ら改善方法を考えることも可能となるからです。 ・ 企業の経理業務は独自のシステムが運用されており、それを理解するにはOJTで十分である。しかし、それをコントロールし、上層部に適切な意思決定を下すに足りる情報を提供するには、やはり会計理論の理解とディベート力、分かりやすい資料の作成能力が不可欠であり、会計研究科での学びはそれを満たすものであったと確信している。
---	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・売上高、当期利益等の目先の数字のみならず、会計処理は、誰のために、何のためにどのようにして考えられているのかという知識が身につくことによって、一人称から三人称の目線にとらえることができ、相手とのコミュニケーションに役立っております。 ・会計的思考や各種金融に使用される考え方には、基盤となる知識の有無で理解力に差が出ると考えるため。そしてお客様にそれを「伝える」には理解した上で噛み砕いた表現、例えにする必要があり、原理・原則を学んだことは大いに役立っている。 ・原則的・理論的に学ぶ事で、学校法人会計や社会福祉法人会計の財務書類にも構造的に考えることができるようになった。 ・租税法の授業で、計算だけではなく、ルールを決める考え方が教えられました。
イ	<ul style="list-style-type: none"> ・原理・原則を学んだ上で、ケーススタディにつながる流れが良かった。学部ではケーススタディ的な要素が少なかったので、専門職ならではの学習は、今でも役に立っています。 ・ケーススタディでは数学がどのように出てくるかを見れたこと。考えられたこと。 ・論文式試験で、ケーススタディやゼミでの経験をもとに記述することができた結果、個人的に満足のいく答案が作成できたと感じたため。 ・実際に仕事をする上では、勉強した知識そのものよりも、それを仕事でどう活用するのかがの方が大事だと感じたからです。 ・実務家教員との関係が、仕事上の会話の中で、1つのきっかけとなることがある。 ・「会計学」を学ぶだけなら、どこであってもできます。実務家教員による、実務により近い学習項目が「大学院」という付加価値を向上させるものであると思います。 ・現役バリバリでやられていた会計士出身の先生のお話はモチベーションの面でも内容の面でも大変ためになったと思うから。 ・経験、実務と理論の融合が、現実の問題解決に役立ったから。 ・実務的な授業の経験は民間で働く上で役に立ったと感じることは多い。企業経営者の発想や思考のトレースに有益。 ・ケーススタディは、企業の担当者が注視している点を学べたり、工場の現場を見ることで、今まで学んできた事柄を考え直すことができた。
ウ	<ul style="list-style-type: none"> ・実務では、顧客に分かりやすく説明をする必要があり、そのためには自分自身が理解しているだけでなく、どのように説明すればよいかを知らなければならない。 ・基礎、研究演習を通じて、1つのことを深く掘り下げて議論し、自分の言葉で表現するスキルが身についた。 ・自分の考え方や説明など、相手に分かりやすく伝えること。相手に自分の思いを伝えてこそその知識であると思うので。 ・実務は丸暗記の知識だけでは通用しません。自分で「考えること」が大事で、その術を学べました。 ・資格試験対策用の専門学校での授業と違い、判例研究など実務における諸問題について学習でき有意義であった。 ・各科目、自ら学ぶ姿勢をもって学べば、理論ベースが出来るので、発展的思考力を身につけることができたと考えるため。特に、ゼミは教授から個別的指導を受けられた分、そう強く感じた。

エ	・人生で1番勉強したという自信がついたため。
オ	<ul style="list-style-type: none"> ・友人とのコミュニケーションによって、狭くなりがちな視野を広げることができたため。 ・1人で学習をしていると他人との距離（ギャップ）をつかめない場合がありますので相互学習は効果的と思います。 ・自分以外の考えを聞いて新たな発見があり、勉強になりました。また、お互い教え合うことで、より知識が深まったと思います。 ・学習する量が膨大であるため1人ではモチベーションが維持できないため。 ・自習室を与えられることにより、学生同士で勉強で分からないところを教え合ったり、気分転換にお話をしたりと勉強のモチベーションを維持するためには欠かせないものでした。 ・既存の理論について、他の院生と勉強することにより、受験勉強だけでは得られない切り口や考え方を身につけることができたと思う。
カ	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ目的を持つ者同士で学習意欲を高められたことは大事。 ・ビジネスの現場や経営の問題をMBAの方々、社会人の方々と話せたことが視野を広げるきっかけとなったため。 ・税務コンサルティングの実務に携わる前に 当局サイド、実務家（納税者）サイドと判例などについての深いディスカッションを通じて、バランスのとれた対局的な視点を身につけることができた。

問7 会計専門職業人が今後重視すべきと思うことを次の中から選んでください（複数回答可）。

ア 会計・経営に係る専門的知識・技能	39(27%)
イ 法律に係る専門的知識・技能	23(16%)
ウ 海外経験・語学力	27(19%)
エ ディベート能力	23(16%)
オ リーダーシップ	12(9%)
カ ICT活用能力	16(11%)
キ その他 (ビジネスマナー、人的つながり、コミュニケーション能力)	3(2%)
	143(100%)

問8 その他に意見があれば、自由にご記入ください。

- ・英語が、ビジネスや会計税務の専門サービスの場でも避けられなくなっています。英語を少しでも取り入れた授業を設けても良いかと思います。
- ・語学力（特にビジネス英会話）を授業に取り入れて頂けると社会に出て役立つと思います（海外子会社とのやりとりなど）。
- ・中小企業は内部統制の意識が低いです。思考の中に法令にのっとっていることを示す内部規定を用意する意味が理解できない又はそういうものを知らない企業が多いと感じられます。さらに、税理士がそういうものがあることを知らないので指導ができないのだと思います。今、事業者はマイナンバー対応におわれており、中小企業だけでなく税理士ですらどうしていいのか分からない状況です。私は研究科で学んだことがあるので内部規定をおいておくことが必要だと感じ勉強を始めましたが、税理士でそこに気付いている方は少数です。誰かに言われるまで待っている状態では生き残れないでしょう。今後、さらに知識と情報と人のネットワークが重要になってくるでしょう。
- ・学部、学科の性質上、上場企業対象の設計になっていますが、卒業、修了生の中には、

中小企業への就職をしている人も多く、学んだことと仕事のギャップがあったり、役に立たなかったり、学習意欲が出ないことも考えられるし、またそのような学生も見受けられました。中小企業を下に見る空気があるように思い、その空気感で若者が中小企業に仕方なく就職しても力が出ないと思います。経営研究科とのコラボ（特に中小企業、同族企業関係）をはかり、より現実に則した勉強ができるようにするのも策かと思います。

- ・私が中小企業の現場に立つて思うことは、私達が普段話している言葉が難しいと感じられてしまうことです。専門的なことを噛み砕いて伝えることの難しさを体感しています。
- ・会計研究科の学生は、志を高く持って入学してくるだけあって自ら学ぶ意欲があり、またディベート能力も高いと思います。このディベート能力はさらに伸ばして行っていたらと社会に出てからより一層役立つと思います。
- ・財務課の所属といっても、税務や法律は必要なので、会計専門職業人として生きるなら、もっと原則的な考え方と、各法律の理解が必要だと業務をしていて思う。また、これからの時代はICTの活用能力は必須なため、ある程度は大学院時代に学ばなくてはならない。